



建学の精神

東京女子大学は、「すべて真実なこと」(フィリピの信徒への手紙4章8節)を標語とし、また犠牲と奉仕の精神をあらわす二つのSを組み合わせて校章として、キリスト教を基盤とした人格教育を行っています。初代学長新渡戸稲造は、「基督教の精神に基いて個性を重んじ世の所謂最小者(いとちいさきもの)をも神の子と見做して、知識よりも見識、学問よりも人格を尊び人材よりは人物の養成を主としたのであります」と述べ、女子には大学の門戸が開かれていなかった創立当初の時代より、女子に対して高度なりベラル・アーツ教育を行なってきました。

東京女子大学のリベラル・アーツ教育は、単にいろいろな知識を修得するだけの教育ではなく、何が真理かを自由に考え、既成概念から解放され、困難を克服できる人間力を備えた学生を育てることを目指しています。



東京女子大学 校章・マーク
「犠牲と奉仕」英語では Service and Sacrifice の頭文字の S を二つとったもので、十字架の形でもあり、縦は神と人との関係、横は個人と個人の交わり・社会性を表わしています。

学校法人 東京女子大学

〒167-8585 東京都杉並区善福寺2-6-1

TEL : 03-5382-6340

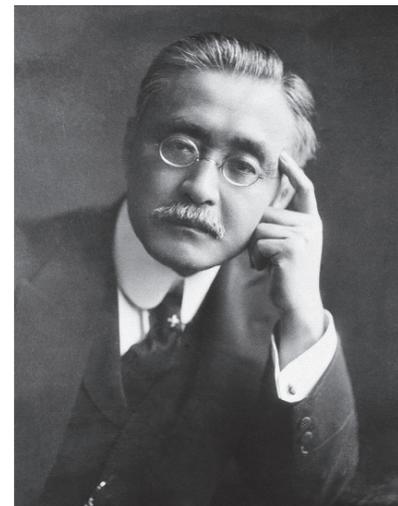


創立

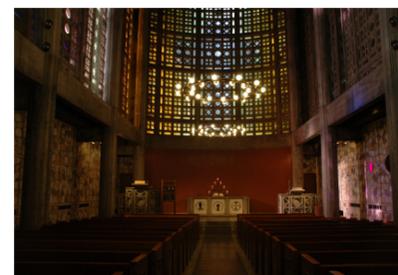
イギリスのエディンバラで、1910年(明治43)世界宣教会が行なわれました。ここでアジアにキリスト教主義の大学を設立することが提案され、教育委員会代表であった J・F・ガウチャー博士が翌年来日し、在日の各教派宣教師社団と大学設立の可能性について協議を重ねました。しかしガウチャーたちに託されたのは、日本にキリスト教主義の男子大学をつくる可能性についてであり、女子大学の設置は直接の目的とされませんでした。

ところが女子教育が甚だしく立ち後れていた日本の事情が、1912年(大正元)超教派の女子大学設置のための促進委員会の発足につながります。この委員会には各教団から邦人、外国人各1名を出すほかに津田梅子、A・K・ライシャワーらが加わり、暫定委員会が組織されました。

当時、多くの教団は、既に女子中等教育機関の経営にあたっており、この計画は自校に割り当てられる資金の減額を意味するものでもありました。既存ミッションスクール間で緊密な関係をつくることができなかったキリスト教主義男子大学は、〈東亜大学〉という仮称まで用意されながら、計画を頓挫させます。しかし、立ち後れた女子高等教育の必要性は、多くの困難を乗り越えて一致団結することを可能にし、〈フェリス女学校〉、〈青山女学院〉、〈女子学院〉などが、それぞれの専攻科を廃止して、新しいキリスト教主義女子大学への進学を進めるなど、協力を惜しみませんでした。1918年(大正7)創立された〈東京女子大学〉の初代学長として、理事会は新渡戸稲造を推挙しました。



初代学長 新渡戸稲造 (1862~1933年)
「一日に一度は一人になって瞑想し、内省すること、祈ること」と勧めました。



創立の背景と歴史

初代学長に就任した新渡戸稲造は、南部藩士の子息として盛岡に生まれました。札幌農学校でキリスト教に入信し、同級生には内村鑑三がいます。

1881年(明治14)アメリカのジョンズ・ホプキンス大学留学中にクエーカー派になり、メアリ・エルキントンと結婚しました。内村と新渡戸は、東京の普連土学園の創立にも大きな影響を与えています。札幌農学校助教授としてドイツの諸大学に学び、帰国後は札幌農学校教授と北海道庁技師を兼任しました。日本でごく初期のキリスト教主義女子大学の学長として、キリスト教信者であり、国際的視野が広く、一流の学者で女子教育に理解のある新渡戸がふさわしい、と判断されたのです。

1920年(大正9)国際連盟事務次長に就任した新渡戸は、スイスのジュネーブに赴任することになり、1923年(大正12)学長職を辞し、名誉学長に推挙されました。

新渡戸の後を継いだのが、安井てつ(1870~1945年)です。1900年(明治33)パリ万国博覧会に審査委員として参加していた新渡戸は、ヨーロッパ視察中に安井と出会います。

古河藩士の長女として東京・本郷曙町に生まれた安井は、高等師範学校女子部を卒業後、岩手で教鞭をとります。1896年(明治29)イギリス留学を命じられ、ケンブリッジ並びにオックスフォードで教育学、心理学を学びました。帰国途上、新渡戸と出会い、帰国後に本郷教会の海老名弾正牧師から洗礼を受けます。シヤム(現・タイ王国)の皇后女学校教育主任、イギリスのウェールズ大学留学などを経て、東京女子大学創立時には学監に就任。多忙な新渡戸学長を支え、実質的な運営を司りました。

第2代学長に就任してからは、1940年(昭和15)に辞任するまで、大学の基盤づくりに尽力しました。戦時色の濃くなった時代にも、キリスト教主義大学としての根幹を守り抜きました。

また東京女子大学の創立にあたっては、アメリカ長老派教会の A・K・ライシャワーが尽力しています。ライシャワーは明治学院高等学部長を務めるかたわら、アメリカ本国の協力委員会との折衝にあたり、苦しい財政を支えました。次男の E・O・ライシャワーは日本研究者となりハーヴァード大学教授として多くの日本研究者を育成し、のちに駐日アメリカ大使を務めましたし、長女フェリシアが熱病のために幼くして聴力を失ったことをきっかけに、ヘレン夫人とともに日本聾話学校の設立にも携わり、日本のキリスト教教育に深く関与しています。

東京女子大学の最初の校舎は、アメリカ長老派教会の宣教師 M・ツルーが女性のために建てた療養施設で、1897年(明治30)〈衛生園〉となった建物を利用しました。これは女子学院分教場としても使われ、東京女子大学以外にもいくつものキリスト教主義の学校の校舎として使用されました。財政難の中でも、1924年(大正13)井萩(現在の善福寺)キャンパス、1966年(昭和41)牟礼キャンパスを開設、特に井萩キャンパスの設計には、帝国ホテルの建設のためにフランク・ロイド・ライトのアシスタントとして来日していたチェコの建築家アントニン・レーモンドを登用、現在では建築史に残る名建築となっています。